

大学における課外のスポーツ活動についての問題

——生涯体育に関する研究二——

大 澤 啓 蔵

一 はじめに

現代社会における人々の生活は科学技術の進歩などによって、人類の歴史においてかつてない程急激に、しかも複雑に変化してきていると言える。

労働は機械化やオートメーション化によって、身体的労働から精神的・知能的労働へと移行し、身体活動を減少させるとともに、身体的な能力よりも知能的な能力を尊重するような社会的傾向をも生み出した。また、交通機関の発達⁽¹⁾は知識や情報の伝播と物の流通を拡大した反面、人々の生活の中から歩いたり走ったりという身体活動の機会を奪う結果となった。一方、職業生活による人々の生活時間の変化は食事の習慣の変化をもたらし、生産技術の向上によって食糧の大量生産が可能になり、供給が充足されるに従って相対的栄養過剰の傾向が現われてきた。このように、我々の生活の中における慢性的な身体活動の不足と相対的な栄養過剰の状態は、肥満や成人病という現象として現われ、今日の大きな社会問題の一つとしてクローズアップされてきている。⁽²⁾

また、労働時間の短縮によって労働から解放された時間、いわゆる余暇が増大し、この余暇をいかに善用するかという問題が出てきたり、あるいは没個性的な職業生活からくる人間性の疎外や、複雑な社会機構が生み出すさまざまな重圧からいかに人間性を回復させるかという問題が出てきている。そして、教育の高度化が進行するにつれて、労働や余暇を始めとしてあらゆる事に対してする人々の意識や価値感も多様に変化してきている。

このような社会的状況を背景にして、広い意味でのスポーツが、ただ単に運動不足の解消や労働の気晴しとして行われるだけに留まるのではなく、日々の生活の中で、個人にとって有意義な活動として、しかも生涯にわたって行われなければならないという立場に立って生涯体育（生涯スポーツ）を考えてきている。特に、学校教育の最終段階である大学においては、学生達が体育・スポーツとかわり合うことによって一層の理解を深めるならば、将来にわたってスポーツを実践して行く可能性がより開けるのではないかと考えた。

このようなことから、筆者は前報⁽³⁾において大学正課体育の在り方を考え、どのような内容を指導して行くべきかについて若干述べた。そして本報においては、大学における正課体育以外のスポーツ活動（課外体育）の中で特に、運動部やスポーツ同好会の活動に焦点を当てながら、一般学生との関係や体育施設の問題などについて、現在の状況、問題点あるいは改善すべき点を生涯体育的視点から述べてみたいと思う。

二 課外体育について

わが国における学校スポーツは明治初期に外国人教師達によって、外国スポーツが紹介され指導されたことによつ

て始まるようである。そして、学生達の積極的な参加によってスポーツが盛んに行われ、同好の志が集まって旧帝国大学などを中心とした学校において陸上部、野球部、ボート部などが作られた。その後、学校に校友会や学友会が組織されると、その部門の一つの活動としてスポーツ・クラブが次々と生まれ、スポーツもテニス、サッカー、ラグビーなど種目数が増加し学生のスポーツ活動が盛んになって行った。明治時代の終り頃には、学生のスポーツが盛んになった反面、運動競技の行き過ぎや対校スポーツ競技の不祥事などがあり、社会の注目を集め批判を浴びることもあった。大正時代を経過し昭和に入ると、学校スポーツが一層盛んになるとともに国民一般のスポーツへの関心が高まり、スポーツの大衆化への動きが強まった。また、スポーツや体育に関する組織や研究機関が次々と生まれ、スポーツ団体の組織化やスポーツに関する調査研究の態勢が整い始めた。しかし、しだいに国家主義思想が強まるとともに軍事的教育がとられ、体育・スポーツもしだいに軍事教練の色彩の濃いものとなり、日本が戦争への道の歩んで行くこととなった。そして、この頃から第二次世界大戦終結まで特に、外来スポーツに対する弾圧があり、スポーツ空白の時代を経過することとなった。

第二次世界大戦後、国家再建の兆しがあらわれる中で、学校教育も新しい民主的教育思想に立って再出発し、学校スポーツも特別教育活動という学校教育の一環として位置づけられ、スポーツ活動の教育的価値が重視されるようになった。大学における課外体育も、明治時代以来の伝統を持った、いわゆる運動部によって対外スポーツ競技活動を中心としたスポーツが復活し、日本アマチュア・スポーツの中心的な存在として今日まで発展してきている。そして、最近における大学のスポーツ活動で注目すべき現象は、対外競技的な活動よりもレクリエーション的なスポーツ活動を志向する、いわゆるスポーツ同好会が作られるようになり、急速な勢いでその数を増して来ているということであ

る。

激しく変化し悪化する現代社会で、特に近年においては、課外体育の教育的意味が重要視されて来ており、松延氏は現代の社会的要求をふまえた立場から課外体育について次のように述べている。「いよいよクラブ活動……レクリエーションの教養が人類の重要な課題になると予測される。クラブ活動とはその知慧と技術と能力を培う場であり、その緊要性は高く、人類の生存権に直結する社会・教育的重要課題であるともいえる。」⁽⁴⁾今日、交通機関の発達やオートメーション化による身体活動の減少からくる運動不足や体力の低下が社会問題となつておることや、高度な工業化によって余暇が増大する傾向の中で、人間性を回復し有意義に過す活動が求められており、スポーツをその解決法の一つと考えるならば、スポーツを実践して行く教養を身に付けることが大学体育の目標と言えるのではなからうか。そして、大学体育における正課体育と課外体育との関係については、正課体育を基礎的・全般的な学習内容を学ぶ場とし、課外体育がその応用・発展型として、学生個々の特性や志向するところに合わせて理解を深めていく場になることが大切であると思われ、さらに、正課体育と課外体育とが有機的なつながりを持って行われることによって、より一層の教育的目標が達成できるのではないかと思われる。このような意味で、課外体育は大学体育の中で、その機能を充分に發揮して行かねばならない時期に來ていると考えられる。

三 現状と問題点

今日の社会的要請から課外体育の重要性が増していることは前述した通りであるが、それでは、はたして現在の大

学における課外体育の現状はどのようなものであろうか。ここでは、大学課外体育の中心である運動部と最近の新しい傾向であるスポーツ同好会の活動について、その現状をながめるとともに、生涯体育的視点から問題点や改善すべき点について述べてみたいと思う。

(一) 運動部

大学運動部は本来、学生の自由な意志に基づく参加によって成立する。すなわち、スポーツを志向する学生が集まってクラブを組織し、対外競技において勝敗を競うことを当面の目標としながら練習に励み、技能の向上をはかると同時に、スポーツすることの喜びや満足感を体験し、クラブの人間関係を通して人格の陶冶を図る場であると考えられる。しかしながら、運動部の対外競技活動が勝利主義の方向に傾いてくると、クラブの運営や人間関係などの本来あるべき姿が歪められてくる⁽⁵⁾ことがある。このような、勝利主義へ傾斜したクラブの人間関係は「学年や競技の優劣などが強く反映するため、水平的な人間関係よりも垂直的な人間関係が強化されるようになり、下位集団の発生する可能性が大きくなる。」⁽⁵⁾と言われるように、クラブの運営が民主的なものから、先輩、上級生、コーチといった一部の人間の意志を強く反映した威圧的・強制的な運営に傾いていく。そして、練習や規律も厳しくなり、個人の特性が無視された画一的なものとなって忍耐と服従が要求されることも多くなってくる。一方、こうした運動部を取り巻く大学側やO・Bなどが対外的な成績を期待し、その期待が過度なものになると、一層対外競技で勝利することが至上の目的となってくる。こうしたことによって、特別な入学制度や優遇制度が作られ、有望選手を獲得するといふことが行われるようになる。選手は学業を放棄して練習だけに励むというプロ・スポーツの養成機関に近い様相が現われてくることもある。そして近年、アメリカの大学では、このような現象が極度に進行していることが報じられ

ている。⁽⁸⁾

このような、学生スポーツの現状を松延氏は「学生の対抗競技は、大学における体育・スポーツの頂点を示すものであって一般社会の興味もまたひとつよく、これに集中している。そしてこのことは対抗競技が良くも悪くも大学教育さらにひいては高等学校以下の一般教育のうえにも深刻な影響力を有することを示唆するものということができよう。およそ大学における対抗競技は、真にアマチュアリズムの精神により、大学の機能と合致し、かつ教育的目的にそって営まれるべきものであって、これを他の目的達成の手段に悪用してはならない。物質的利益を指向し、また売名的意図をもって、学生スポーツ本来の精神を冒瀆し、その教育的機能を阻害するばかりでなく、かえってはかり知れない害毒を伴うことを知らなければならない。」と批判し、警告している。

運動部が一部エリート的な部員達によって勝利主義的な活動が行われるようになると、体力や素質、技能に劣る者は、活動の中心からしだいに隅へと追いやられる結果となる。そして、疎外感や挫折感を持った者も出てくるようになり、最悪の場合には、クラブから離脱するということも起ってくる。このことは、多くの学生達が参加すべき開かれた運動部から、一部のエリート学生だけが参加する閉鎖された運動部を形成して行くことになる。

(二) スポーツ同好会

近年、大学におけるスポーツ活動の大きな特徴の一つは、スポーツ同好会の誕生とその急速な発展ではないかと思われる。スポーツ同好会は従来の伝統的な運動部の特殊な性格に対する反発や、競技志向から来る厳しい練習を敬遠する傾向から、また、世の中のスポーツ・ブームを反映して気軽にスポーツを楽しみたいという志向から、最近、大学においてその数が増加して来ている。そして、体育会における承認問題や体育施設をめぐる問題など、運動部との

間に摩擦がないわけでもない。それでは、このスポーツ同好会はどのような性格を持っているのであろうか。佐伯氏は学校におけるスポーツ同好会を次のように特徴づけている。⁽⁸⁾

- ① フォーマルなものへの依存度は弱く、自発性が強調されること。
- ② 勝利志向よりはスポーツを楽しむこと、健康を維持すること、親しい人間関係を作り社交を楽しむこと等が重視されること。

③ 水平的な秩序が中心であり、民主的な性格と平等が尊重されること。

④ 活動の組織性や計画性は柔軟であるが安定性が弱いこと。

⑤ リーダーはメンバーの相互選出によって選ばれること。

⑥ 規則は専制的でなく、メンバーの総意によって作られ、変更も可能なこと。

⑦ 経費はメンバーが負担すること。

⑧ 入会、退会がかなり自由で集団の個人に対する規制が弱いこと。

⑨ 一般にメンバーのモラルはそれ程高くなく、激しく変動すること。

⑩ 以上の特性から、集団としては社会的統合、成員補充、目標達成等の機能において不安定な性格を持つこと。

スポーツ同好会は、とかく運動部にありがちな強制と服従といった人間関係ではなく、民主的な人間関係があらわれ、活動の計画や内容も楽しみながら行うというレクリエーション的色彩が強くなっている。そして、体力や技能に特別秀れていなくても活動に容易に参加するためにスポーツ同好会へ参加する学生が増加している。しかしながら、このようなスポーツ同好会も対外的な試合を志向して勝利を目標とし、その威信を高めクラブとしてのまとまりを強

化して行こうとするようになると、練習や規則がしだいに厳しいものになり、しだいに運動部的な性格のクラブに移行していくこととなる。これとは反対に、より自由に気軽にスポーツ活動を楽しもうという意識が強調され、個人個人の意志が優先するようになる。クラブを維持していく規則が形骸化し、名簿だけのメンバーが増加したり、活動が不規則になりクラブとしてのまとまりがなくなり、ついには消滅するという結果にもなり兼ねない。また、監督やコーチなど指導者がいないために正しい練習よりも利便的な練習に陥り易く、クラブ運営の面でも適切な指導を受けられる機会が少ない。このように、スポーツ同好会はさまざまなスポーツ欲求を持った多くの学生をスポーツ活動に参加させる可能性を持つ反面、参加する学生の志向する方向や目的によって容易に変容するため、安定性のある活動を長期にわたって着実に維持して行くことが難しいと言える。

(三) 生涯体育とのつながり

大学における課外体育としての運動部やスポーツ同好会などの活動は、正課体育を基本としてその応用・発展的な役割として重要な意味を持っていることについては既に述べたとおりである。それでは、生涯体育との関わりの中でスポーツ活動に参加することの意義と、運動部やスポーツ同好会が今後どうあるべきかについて述べてみたいと思う。

まず第一点は、大学の時期は学生達がスポーツ活動を行うのには好ましい時期であり、大いにスポーツに励むべきであるということである。それは、一八歳から二二歳ぐらいという年齢が人間の身体的・精神的な完成期にあり、この時期に適切な身体活動が不可欠であるという点からばかりでなく、大学は体育施設や指導者あるいはスポーツを行う時間的余裕といった環境的・時間的側面からもスポーツ活動を行うに適した条件が整っている。また、大学が学校教育の最終段階にあり、同時に職業人として社会生活を送って行く直前の時期でもあるわけで、こうした時期にスポ

スポーツ活動を通じ、健康で充実した体力を備えておくべきであると考えられる。

第二点は、運動部やスポーツ同好会などのスポーツ活動を通じてスポーツを日常化し、生涯にわたって続けて行ける教養や習慣を身につけるべきであるという点である。

大学時代にスポーツに打ち込み、十分に体力を高めしつかりした運動技能を身につけておくとともに、さまざまな体験を通してスポーツの楽しさや喜びを知っておくことも重要である。そうすることによって、大学卒業後も長く運動生活を続けることができ、それぞれの能力に合わせて種々の競技会やスポーツ大会に出場したり、職場や地域のスポーツ・クラブに参加するといったスポーツ場面への参加がより可能になる。このように、普段の生活の中にスポーツを取り込むことによって生活に変化と活気をもたらすことができる。そして、中期・高年期に達してからも、若い時代に身につけた基礎的な体力や運動素地を生かして、それぞれの年齢にふさわしいスポーツを発見し、楽しみながらおこなって行くことによって体力や健康を維持しながら充実した生きがいのある生活を送ることができるのではないだろうか。

第三点は、体育・スポーツの指導者としてふさわしい資質を身につけるべきであるということである。大学を卒業後社会人として、大学時代に培ったスポーツの技能や知識を生かして職場や地域社会におけるスポーツ活動の場で、指導者として指導に当ることも少なくないと思われる。特に、運動部活動を通じて競技の場で修得した高い水準の技能や知識を持った者は積極的に指導者として貢献すべきである。このように考える時、ただ単に技能を向上させて競技に勝利することだけを目標とするのではなく、同時に将来の社会体育指導者としての資質を身につける必要があるのではないか。クラブの活動が伝統的に受け継がれた練習法を盲目的に繰り返したり、勘や経験にたよる技術修得を

するのではなく、その種目の持つ技術的構造を研究し、運動生理学的に裏付けされたトレーニング方法を取り入れたり、あるいは傷害の予防（安全管理）、疲労、休養、栄養の問題などスポーツの周辺にある事がらについても学問的に正しい理解を深める必要がある。そして、科学的で合理的な練習を行いながら正しい技術を修得することによってスポーツ指導者としてふさわしい資質が向上されるのではなからうか。

第四点は、このように考えてくると、運動部やスポーツ同好会の活動に、より多くの学生が参加できるようなクラブの今後の在り方が考えられなくてはならない。

現在、学生の運動部離れが進行している状況には、さまざまな原因が考えられるが、依然として一部の体育会や運動部に必要以上の上下関係や、礼儀や服装についての特殊な習慣が残っていたり、競技能力中心の運営がなされていることにも関係があると思われる。今後は、一部エリート的な部員だけの運動部から、さまざまな学生を受け入れられる開かれた運動部を作ることによって、スポーツを志向する学生の参加が増加するであろうと思われる。また、スポーツ同好会は参加し易いという点では好ましい点を持っているが、活動の安定性に乏しく安易な方向に流れ易いという欠点も持っている。そして、メンバーの社会性やマナーについての配慮に欠けたクラブもないわけではない。これらの原因の一つには、正しい指導者が得られにくいということや、大学における体育施設の確保が困難であるという点が挙げられよう。今後はこのような問題を克服するために、学生部や体育会あるいは既存のクラブとの関係を強めながら、着実な活動が行える状況を作っていくことが大切であると思われる。

四 体育施設の問題

大学の体育施設は正課体育を始めとして、運動部、スポーツ同好会あるいは体育的行事など学生達のさまざまな体育・スポーツ活動を行う場として最も基本的で重要な場所である。そして、このような体育館やグラウンド、テニスコートなどの体育施設は本来、学生達の運動需要に対して質的にも量的にも充分対応できるものでなくてはならないが、多くの大学において体育施設が不足しており、限られた施設や設備の枠の中で体育・スポーツ活動が行われているのが現状ではなからうか。そして、限られた体育施設の利用状況についても解決すべき問題があるように思われる。

わが国のスポーツは、大学など学校スポーツが基盤となって発展して来ており、大学運動部はその中心的な存在として役割を果たして来たわけである。このようなことから、現在でも運動部の活動が重視され、伝統を持った特定の運動部に対しては活動に要する経費やその他の面でさまざまな援助がなされたり、専用の施設が作られるといった便宜が与えられている。そして、全体的な体育施設利用の状況を見ても運動部中心の現状をうかがうことができる。

体育館やグラウンドなど多目的に利用できる施設では、その施設を幾つかの団体が交代に利用して活動を行うことが多い。このような施設を利用する場合は話し合いなどによって割り当てる仕方が決定されるわけであるが、運動部間に暗黙の序列ができ上がっており、対外競技の実績があつて伝統的な力を持つ団体の発言力が強く、優先的に利用する機会が多い。そして、伝統がなかったり対外競技の実績に乏しい団体は利用時間やスペースに制限が加えられ易い。また、レクリエーション的なスポーツ活動を中心とするスポーツ同好会が増加している今日、伝統も競技実績も持た

ないスポーツ同好会は、ほとんど大学内の体育施設を利用する機会には恵まれず、学外にある有料の公共の体育施設を利用して活動を行ったり、時には営利を目的とした高い料金の施設を個人の負担によって利用せざるを得ないという状況が出現してきている。このようになってくると、一部のスポーツ同好会は、ただ単にメンバーが同じ大学の学生であるというだけで、活動が全く大学と無関係な場所で行われ、大学側がその活動状況の把握や指導をできないこととなり、学校におけるスポーツ集団として教育的意味が失われた集団になる恐れがある。一方、大学には運動部やスポーツ同好会に所属していない学生達があり、全体から見てもこのような学生達が圧倒的に多く、今日このようなスポーツのクラブから離れたところにいる個人の学生達の運動欲求が拡大してきている。しかしながら、このようないわゆる一般学生が大学の体育施設を利用できる機会は運動部が使用しないごく僅かな時間であり、優先的に自由な体育施設を利用できる機会は全くないと言っても過言ではない状況にある。一般学生の日常的な身体活動の場は学外にある公営や営利の施設を利用するか、大学構内の道路や広場などでキャッチボールやその他の遊びなどという形での運動欲求を満しているのが現実の姿ではなからうか。

このように見えてくると、個人の運動やスポーツ活動の要求を増大させ、日常の生活の中での運動習慣を助長し、一人でも多くの者が生涯にわたってスポーツに親しませるという生涯体育の立場からは改善すべき点が幾つもあるように思われる。

まず第一に、今後、体育施設をより一層拡充して行く必要があると考えられる。しかし、今までの施設づくりは公共の施設づくりにおいてもスポーツ競技や行事を念頭においた競技場中心の施設づくりがなされてきているという批判⁽⁹⁾があるように、大学においても運動部やスポーツ競技のための施設づくりが中心であったように思う。大規模な体

育施設もそれなりの意味は持つてはいるが、学生達の運動欲求が個別化し多様化しつつある今日の状況には対応しきれない面も出てきているように思われる。今後の体育施設づくりは、競技中心のものからレクリエーションや体力づくりのための施設を拡充して行くことや、個人や少人数のグループの利用を充分配慮した施設・設備づくりの計画がなされて行かなければならないと思われる。

第二は、今までのような一部の運動部優先の施設利用の形態から、今後は全ての学生が有効に利用できる方法を考えていく必要があると思われる。特に、スポーツ・クラブに所属していない学生達の運動欲求にも目を向けて行く必要があると考える。例えば、体育施設を一般学生が自由に利用できる開放などを設けて、必要な運動用具の貸し出しを行ったり、スポーツ教室といったものを多く開催してスポーツの指導を行うことなどである。このようなことから少しでも、個々の学生がスポーツに参加できる場や体育施設を利用できる機会が増えることによってスポーツに親しむことができると思われる。

五 おわりに

大学における体育・スポーツは今日、重大な時期に來ていると思われる。最近までアマチュア・スポーツの中心的存在であった大学運動部が、大学入試制度や若者の価値感の変化などさまざまな要因によって凋落の傾向を示している反面、一部においてはエリート化した部員達によるプロ・スポーツの予備軍的な運動部も現われている。また一方では、スポーツ・ブームなどによって気軽にスポーツを楽しむたいという学生達が急増し、レクリエーション的な運

動欲求も拡大してきている。このように、大学における体育・スポーツ活動が多様化し複雑化する中で、より多くの学生達がさまざまな形でスポーツ活動に参加し、その意義を享受し大学卒業以後の生活に結びつけて行くべきであると考えらるならば、従来のような見地から大学の体育・スポーツを捉えるのではなく、全く新しい視点に立って考えたい行かねばならないと思われる。

従来の大学体育・スポーツの組織は、ともするとその枠の中だけで体育・スポーツを考えてきたのではなからうか。体育教員、学生部、体育会、部長、監督、コーチなどを有機的に結びつけて一元化した組織を作るべきである。そして、正課体育と課外体育との関係や、運動部・スポーツ同好会の問題、体育施設の問題、一般学生の運動欲求の解決など多くの課題について一元化された組織の中で、総合的な広い視野から現状を認識し、今後の正しい解決を図って行くことが必要なのではないかと考えられる。

注

- (1) 石毛直道「食事の文明論」中央公論社（一九八二）一〇一—一四頁。
- (2) 小山内博「健康なからだづくり」菜根出版（一九七八）。
- (3) 大澤啓蔵「生涯体育における大学体育の役割について」亜細亜大学教養部紀要第二二号（一九八〇）三九—五〇頁。
- (4) 松延陽一「クラブ活動と校内スポーツ」泰流社（一九七三）四八頁。
- (5) 竹之下休蔵他「体育社会学」大修館書店（一九七四）一六〇頁。
- (6) 朝日新聞、大学スポーツ—米國キャンパスの実態—（一九八一、一、四—一、二四）。
- (7) 松延陽一、前掲書、六八頁。
- (8) 平沢薫・佐伯聰夫他「生涯スポーツ」プレスギムナチスカ（一九七七）一四七頁。
- (9) 松井三雄他「教育・体育・スポーツ」杏林書院（一九七五）一〇二頁。

参考文献

- (1) 体育社会学研究会「現代スポーツ論」道徳書院（一九七三）。
- (2) J・スコット、片岡暁夫訳「現代スポーツへの警告」不昧堂出版（一九七六）。
- (3) 菅原禮他「現代社会体育論」不昧堂出版（一九七七）。